

# 令和4年度 第2回 総合教育会議

令和4年9月1日（木）  
午後1時30分から3時30分まで  
県庁別館2階第一会議室

## 次 第

### 1 開会

- (1) 知事挨拶
- (2) 教育長挨拶

### 2 議事

- (1) 魅力ある教育環境の整備 [資料1～3]
- (2) その他
  - ・ 静岡県立高等学校の在り方検討委員会 [資料4]
  - ・ 県立高校の在り方に係る地域協議会（賀茂地区） [資料5]
  - ・ 国際バカロレア機構による認定に向け申請する学校の選定 [資料6]

### 3 閉会

## 「魅力ある教育環境の整備」に関する論点

子どもたちの可能性を引き出すため、「個に応じた指導」や「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善が求められている。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により、学校現場においてはICTの活用が急速に進んだ。ICTを効果的に活用し、学習環境や教育内容を充実していくことが求められている。

一方、こうした変化に対し、学校の施設・設備が対応しきれていない状況があると考えられる。加えて、人口減少を見据えると、特に小規模校における教育の質の維持・向上が課題となっている。

児童生徒の実態に応じたきめ細かい指導・支援やICTを効果的に活用した協働的・探究的な学びを実践していくため、多様な学びを実現できる教育環境が必要である。

### ◆論点 1：自由度の高い授業づくりや児童生徒主体の取組の推進方策

従来の授業形態から脱却し、子どもたちの可能性を引き出す授業への改善や児童生徒が主体となった取組への転換を図るため、具体的にどのような取組が考えられるか。

#### 【検討の視点】

- ・「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「探究的な学び」の深化
- ・ICTの活用や地域と連携した外部人材の活用による授業の実施
- ・生徒が主体的に学びや学校活動が行える環境の整備
- ・新しい授業技術や児童生徒の多様なニーズに対応できる教員の育成

### ◆論点 2：多様な学びを実現する教育環境の在り方

多様な学びを実現する学校施設の在り方や教育の質の確保方策について、具体的にどのようなことが考えられるか。

#### 【検討の視点】

- ・様々な授業形態に対応できる学校施設の設計・建築
- ・他の施設との複合化による教育効果の向上や効率的な施設運営
- ・小規模校で教育の質の維持・向上を図る工夫（遠隔教育、部活動広域化等）

## 「魅力ある教育環境の整備」に係る主な取組

### 1 自由度の高い授業づくりや児童生徒主体の取組の推進方策

#### ○新学習指導要領の実施 参考資料 P 1

- ・令和4年度（2022年度）から、高等学校の新学習指導要領が年次進行で実施されている。この新学習指導要領では、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視しており、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を学び育てるために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うこととされている。

#### ○高等学校における探究の状況（教育政策課） 参考資料 P 6

- ・高等学校学習指導要領（平成30年告示、令和4年4月1日施行）では探究が重視されており、探究的科目（古典探究、地理探究、理数探究など）の新設とともに、「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に改訂された。移行措置として平成31年度入学生から「総合的な探究の時間」に改訂されている。

#### ○ふじのくに学校教育情報化推進計画（教育DX推進課） 参考資料 P 8

- ・学校教育の情報化の推進に関する法律に基づき、学校教育の情報化の推進に関する施策を総合的・計画的に実施するための「ふじのくに学校教育情報化推進計画」を策定した。情報・情報技術を適切・効果的・創造的に活用できる能力を有し、他者と協働して新たな価値を創造する社会の実現に貢献できる人材の育成を目指す。

#### ○デジタルプラットフォーム（静岡型LMS）の構築（教育DX推進課） 参考資料 P 10

- ・学校の特色に併せた様々な校務支援ツールや授業支援ツールを活用している学校もあるが、アナログデータが未だに多いこともあり、各種ツール等から得ることができる様々なデータの連携ができていない。様々なデータを連携させることで、児童生徒全体を俯瞰することにつなげ、個別最適な学びの実現につなげる。

#### ○STEAM教育（教育政策課） 参考資料 P 11

- ・AIやIoT等の急速な技術の進展により、社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成を目指す。

#### ○魅力ある高校づくりに向けた研究（高校教育課） 参考資料 P 12

- ・魅力ある高校づくりを推進するため、国の普通科改革を踏まえて、生徒の学習意欲を喚起し、多様なニーズに応える普通科の在り方を研究する。対象は、原則普通科を設置する県立高等学校としている。

#### ○教職員の研修（教育政策課） 参考資料 P 14

- ・「静岡県教育振興基本計画」に則り、誰一人取り残さない教育を実現し、「有徳の人」を育成するため、静岡県教員育成協議会において、「静岡県教員等育成指標」及び「静岡県教員研修計画」を策定し、静岡県の教員に求められる資質能力の育成に取り組む。

## 2 多様な学びを実現する教育環境の在り方

### ○県立学校施設の老朽化対策及び整備指針（教育施設課）参考資料 P22

- ・県立学校施設の老朽化対策が喫緊の課題となっていることから、平成 29 年度に「学校施設長寿命化整備指針」を策定し、これに基づき令和元年度に「学校施設中長期整備計画」を策定した。本計画に基づき、令和元年度から建替え等の老朽化対策に取り組んでいる。「今後の学校施設のめざす姿」として5つの目標として、①安全・安心でユニバーサルな魅力ある学校施設、②学習意欲が向上する快適な学校施設、③地域と協働し、生涯学習等へ開かれた学校施設、④省エネルギーで環境にやさしい学校施設、⑤教育環境の変化に柔軟に対応できる学校施設、を整理し、整備毎に各項目について検討し、より良い教育環境の実現をはかっている。

### ○県立川根高等学校における川根留学の取組（高校教育課）参考資料 P23

- ・川根地区の中学校卒業生数の減少が見込まれるなか、川根高等学校の学校規模の維持、活性化を目的に、平成 26 年度から県内の他地区から生徒を受け入れる「川根留学」を始めた。平成 30 年度からは、川根本町の意向及び協力のもと、全国募集を実施している。

### ○県立伊豆総合高等学校土肥分校の魅力化（高校教育課）参考資料 P252

- ・年間 5 人程度の県外からの「土肥留学生」の受入れを目指し、令和 5 年 4 月入学生からの全国募集に向けた準備を行っている。

### ○中山間地等の小規模校への支援（高校教育課）参考資料 P27

- ・過疎地域等の学校においては、学校の小規模化が進み、人的・設備的に不足し、多様な学びに応えることができず、学校の魅力も低下することから、生徒の流出が進む傾向にある。令和 3 年度からオンリーワン・ハイスクール事業の区分の一つとして「フューチャー・ハイスクール」を設定し、通学可能な学校が限られている地域（中山間地域、過疎地域、へき地等）等の小規模校において、先端技術や地域人材、民間活力を積極的に学校運営に取り入れ、生徒の多様な学びのニーズに応え、地域で育ち、将来地域の中心となる人材を育成することを研究する。

### ○中山間地域の小規模校における遠隔教育の推進（高校教育課）参考資料 P28

- ・中山間地域における小規模校の教育の質の確保に向けて、単位認定を伴う遠隔授業の実施に向けた調査・研究を進める。さらに、大学や企業等と接続した遠隔授業についても研究を行い、その手法を他の中山間地域の小規模校へ普及し、魅力化を図る。令和 3 年度より、本校一分校間における「教科・科目充実型」遠隔授業については、その教育的効果が対面授業に相当すると認められる場合、36 単位を超えない範囲で単位の修得を認めることとした。

### ○複数校合同運動部活動（健康体育課）参考資料 P30

- ・県中体連や県高体連、県高野連では部員不足等により生徒やチームが大会に参加できない場合には、複数校合同による大会への参加を認めている。

## 「魅力ある教育環境の整備」等に関する実践委員会の意見

### 1 子どもの健やかな成長を支える教育の推進

○心の問題の加速を考えると、生徒と一緒に取り組めるものとして、呼吸法だけでもすぐに開始できるとよい。呼吸法は、心理学や行動療法の分野で既に確かな効果が実証されており、誰でも実践できる。呼吸法について、小委員会で調査や検証をお願いしたい。

### 2 魅力ある教育環境の整備

(自由度の高い授業づくりや児童生徒主体の取組の推進方策)

○静岡型LMSで学習過程の記録と可視化を進め、生徒が探究学習や校外活動に挑戦する過程を生徒と教員双方で記録し経過観察する取組を進めるとよい。過程を含めて評価することで生徒が主体的に取り組みやすくなる。

○「主体的・対話的で深い学び」では、教員の意識が前向きに変わっていくかがポイントである。新しいことに取り組むときには、古いことを一つやめるくらいの改革意識を持ち、教員のモチベーションを保ってほしい。

○探究的な時間を学校設定科目として位置付け、その中で生徒たちが面白がり、それを教員がバックアップする形で取り組んでいる。長く続くのは教員も楽しめる活動であり、そうした活動が広く認知され、各学校でどのような取組ができるか考えていくことが大事である。

○子どもが自ら考えて決め、それを導き、やってみることができると、子どもは自走していく。子どもの意見を聞き、それを実際にやってみることができるようになると、自己肯定感の向上にもつながり、心の問題も少しずつ解決していく。

○探究の授業は、ハードがあってもソフトが整わないと難しく、教員が失敗を恐れている。教員は多忙な中で疲弊感があり、探究活動として新しいことを行うのも難しい。公立では異動によりつながっていきにくいという課題はある。

○個を重要視すると同時に、ルールや規律、道徳等を両立させ、集団のすばらしさや個だけが全てではないということを教えていく必要がある。

○「自由度の高い授業づくり」のためには、親の学びについて県としての方向性を発信し、教育方針に対する親の理解を得て、学校現場で教員が思い切ったことができるようにしないと、現場との乖離が出てくる。

- コの字型は、顔を合わせて自分の意見を言えるので、授業ごとにコの字型やスクール型を取り混ぜて、効果を見ながら実践してほしい。
- 進学校の数学は、個別化をお願いしたい。数学は学力の差があるので、同じ量の課題を与えると疲弊し付いていけない生徒も出てくる。個別化を進めていく方が教える方も教えられる方も効率がよい。
- 心の問題に対して、高校では自己責任という流れがあるが、考え方を変え、高校でも相談室の業務を活性化するとよい。相談室のネットワーク化が進むと、チームでの対応やノウハウの共有が可能となる。
- 学校の教職員の増員が緊急の課題である。2クラスに3人のチーム担任制を採ることで教員もチームで考えることができ、生徒も話しやすいところで問題を和らげることができる。
- 少し頑張れば届きそうな経験を多くさせることで自信が付き、それを見極める目やフォローする指導の技術が大事である。教員になったからといって一流の指導者になれるわけではなく、指導者も成長しないといけない。
- 海外では、18歳以下の世界のトップクラスチームを集めて試合時間をずらすことで全試合観戦できるようになっている大会があり、全世界のトップクラブのスカウトが来る。また、女性レフェリーをが全世界から集まり育成の場にもなっている。こうしたことが静岡でもできる。人材育成こそが静岡の未来であり、子どもたちが本物を見る機会が増えることで刺激を受け夢を持つようになる。
- 子どもたちは、想像以上にインターネットやコンピューターに対する経験が進んでおり、教育現場も最先端のものに変わっていかないと、生活とのギャップが出てくる。教員に対するサポート教育もしていけないと追い付いていかない。
- 読み書き算数はものすごく大事であり、そうした基本を守っていく必要がある。また、日本を経済成長させすばらしい教育を与えてきたのは、集団による土台づくりである。現在最も欠けているのが、この土台の上での自由さ、創造力であり、予算の使い方を変化させながらどのような教育をしていくかが課題である。
- 教育界が大きく舵を切るのは難しいが、完全でなくてもPDCAを早く回していくことが大事である。
- 研究テーマに沿ったフィールドワークを中心とした高校生の約4か月間の研究プログラムを実施してきたが、最終発表の場では達成感が感じられ、探究心、課題の紐解き方やコミュニケーション能力が格段に上がったと実感する。その状態を維持できるかが大事であり、システムとして組み込むことが必要である。教育資源は、地域にも企業にも多くあり、それを最大限活用するための仕組みづくりが必要である。

- 子どもの福祉の点から、オンデマンド、アクティブラーニング、チームでの学び、習熟度別の学習など、ICTの魅力、通信制や単位制を活用しながら、第三の居場所で自由な教育をしていくことが考えられる。
- 子どもが意見を言う、自分の気持ちをきちんと伝えるということで、アドボカシーの制度を県内の公立高校でも始めていければよい。
- 4月1日に「教職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する法律」が施行され、第三者による検討会を設置していち早く取組を始めている県もあるので、性暴力根絶に向けた動きをお願いしたい。
- サッカーでは、モチベーションが下がらないよう、リーグ戦化を進めており、同じレベル同士で試合ができる仕組みを設けている。また、指導者は、リフレッシュ研修を受けてポイントを確保しないとライセンスを取り上げられることになっており、指導者として必要な勉強をする場を用意している。
- 子どもの成長には親の関わりが重要である。「親の心得」を伝え、親も巻き込んで子どもを育てていくことにしている。
- 生徒の少ない学校は、教員の自由度が高く、一方通行でない授業で活気がある。特別免許制度の活用を広げ、教員の予備軍となる人材をもっと投入できるとよい。未来のことを考えて教育に予算を割いていく方がよい。
- 静岡市内のNPOが運営するフリースクールでは、各分野に長けている方をゲストティーチャーと呼んでいる。こうした仕組みを公立学校でも取り入れることができると、打開策が見付かるかもしれない。実業高校でも、商品開発で得た利益をゲストティーチャーを呼ぶ費用に充てるという形であれば、予算がなくてもできる。
- 静岡県の教育の土台として、目指すところ、必要なことと足りないこと、重点を置くところを明確にすると、学びの深さや教育の在り方が変わってくる。
- 財政的な裏付けなしにできることは限られている。何に資金を投入するか判断が大事である。
- 困窮する子どもたちの学習支援の場では、外国にルーツを持つ子どもが多く、様々な問題がある中で、第三の居場所に来てくれるだけでもよいと思う一方、この先の住む場所や就労等が心配になっている。教育の土台は愛である。
- 多様な学びでは、リアルな現場で子どもたちが学びを楽しめるようになると、子どもたちはやる気になっていく。紙芝居で郷土の話を教えてもらい、その話を教員に日本語で教えながら一緒に英訳してみるというように、教科横断的に地域もつながっている取組もある。

### (多様な学びを実現する教育環境の在り方)

- 学習空間の構成も生徒の意欲に影響を与えるので、グループワーク等の主体的な学習をしやすいフリースペースや図書館等の整備が進められるとよい。
- 自由な議論をする雰囲気をつくるという意味では、ハードも必要である。
- 急激な人口減少の中では、極端ではあるが、県立大学と県立高校を一緒にしてしまう、シャッター街になっている商店街に高校を移すなど、マイナスとマイナスを掛け合わせてプラスにするような思い切った施策で学びを大きく変えていくことが静岡の新たなモデルになればよい。
- 過疎地の高校の在り方について、例えば、下田高校南伊豆分校を拠点とした「大人のための農業実践講座」の事業化が考えられる。同校の持つハードとソフトが地域振興に役立つ上、移住者や定年シニア層は農業の基礎知識を求めており、地域のニーズに応えることができる。また、学校と地域との連携が深まるとともに、生徒の実学経験にもなる。過疎地の県立高校は、統廃合の対象として映りがちだが、地域特性に根ざした事業を描き、関係者を調整できる人材を据えることで、地域活性化の一助となるポテンシャルがある。
- 静岡市内に外国人や形式的な義務教育卒業者等に寄り添って学びを提供している自主夜間教室があるが、あまり認知されていないことが課題である。静岡県内の夜間中学ができるので、そうした組織や人のネットワークが広がっていくと次の展開が生まれるかもしれない。
- 人間の成長に合わせて芸術教育は高校で更に進めていきたいが、授業作品ですら展示するところがない。校舎そのもののデザイン性はもとより、作品の展示、演劇やコンサートの実施など、生徒が表現できるスペースが必要である。
- 木材を大いに活用するほか、シンボルとなるツリーやビオトープなど、自然と近い環境により、生徒にも元気が出るような造りをお願いしたい。
- 教育の改革には、トップダウンではなく、各学校、一般の先生から湧き上がっていくことが理想であり、生徒も教員もコミュニケーションをとる場所が必要である。教員で最も気がかりなのが校長であり、校長と見合ってコーヒーが飲めるようなコミュニケーションの場となる部屋が新たな学校には必要である。
- 教員にとって、仲間とのコミュニケーションは心を休め、様々なアイデアをもらえるので、カフェテラスも含めたコミュニケーションの場を校舎内につくるとよい。



## 静岡県立高等学校の在り方検討委員会

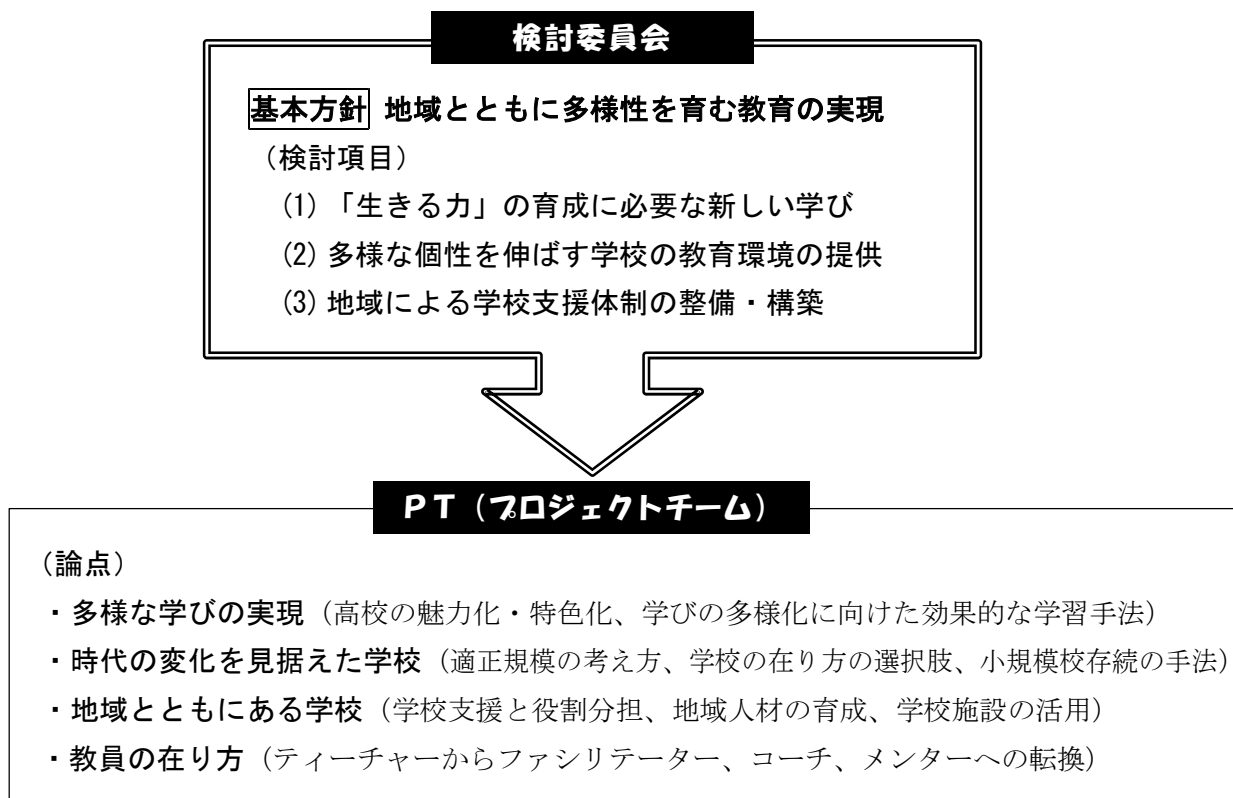
(教育委員会高校教育課)

### 1 要 旨

教育を取り巻く新たな状況変化や課題等を踏まえ、「ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画」(以下、長期計画)で示されている県立高校の在り方について改めて検討するため、学識経験者、教育・産業分野等から幅広く意見を聴取する「静岡県立高等学校の在り方検討委員会」(以下、検討委員会)を設置する。

### 2 協議事項等

検討委員会では、本県高等学校の在り方について、長期的な視点で幅広く議論する。また、検討委員会の議論を踏まえた課題(論点)に対して、専門的知識を有する者等で構成するPT(プロジェクトチーム)を設置し、研究協議を行う。



### 3 令和4年度のスケジュール(予定)

時期	検討委員会／PT	地域協議会
4月～8月	定例会等で今後の検討の概要報告、検討委員会準備等	事前調整等
9月6日(火)	第1回検討委員会	賀茂・小笠・沼駿 (7月～)
9月下旬～	PT協議(～12月)	
11月25日(金)	第2回検討委員会(中間まとめ)	
1月	第3回検討委員会(取りまとめ、「基本方針」の策定)	

#### 4 検討委員会の委員構成

学識経験者、教育・産業分野及び保護者の代表者等の委員で構成する。

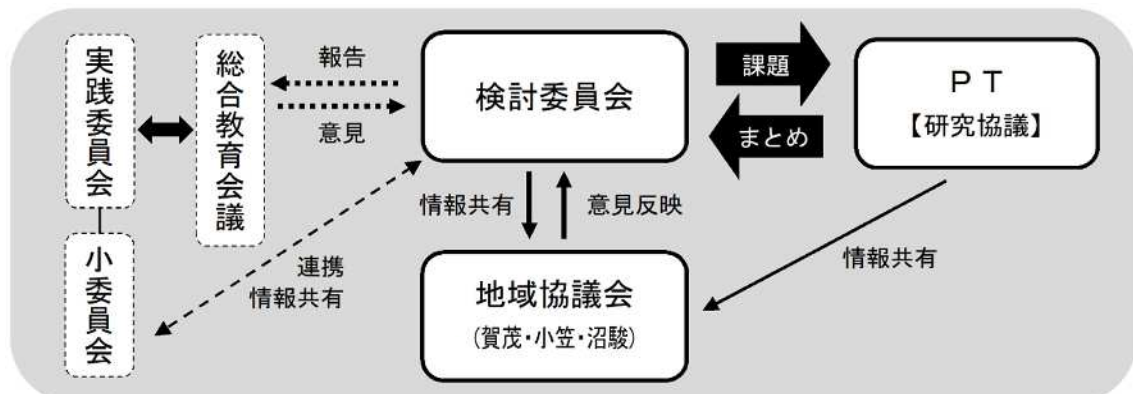
	区分	所属・職名等	氏名(敬称略)	専門	備考	
1	学識 経験者	静岡大学大学院教育学研究科教授	村山 功	教育全般	県総合計画審議委員 (R4.8 就任予定)	
2		静岡産業大学経営学部経営学科准教授	永田 奈央美	e-Learning 教育工学	藤枝市教育委員	
3		公立鳥取環境大学環境学部環境学科 准教授	川口 有美子	学校組織 過疎地域		
4	教育関係者	静岡県高等学校長協会会長	小関 雅司	教育全般 資質向上		
5		静岡県私学協会理事長	仲田 晃弘	学校経営	学校法人藤枝学園 理事長	
6	県 民	産業	株式会社なすび専務取締役	藤田 尚徳	企業連携	実践委員会委員 県教育振興基本計画推進委員
7			ヤマハ発動機株式会社 生産本部モノづくり人財戦略部長	河合 多真美	人材育成 働き方	県教委教員育成 協議会アドバイザー
8		株式会社Z会中高事業本部 マーケティング部長	窪田 雅之	新しい学び		
9		民間 団体	NPO 法人 浜松 NPO ネットワークセンター 代表理事	井ノ上 美津恵	発達障害、 不登校 等	ふじのくに NPO パート ナiership委員会委員
10	保護者	静岡県公立高等学校PTA連合会会長	三輪 高太郎	学校支援	日管株式会社 代表取締役社長	

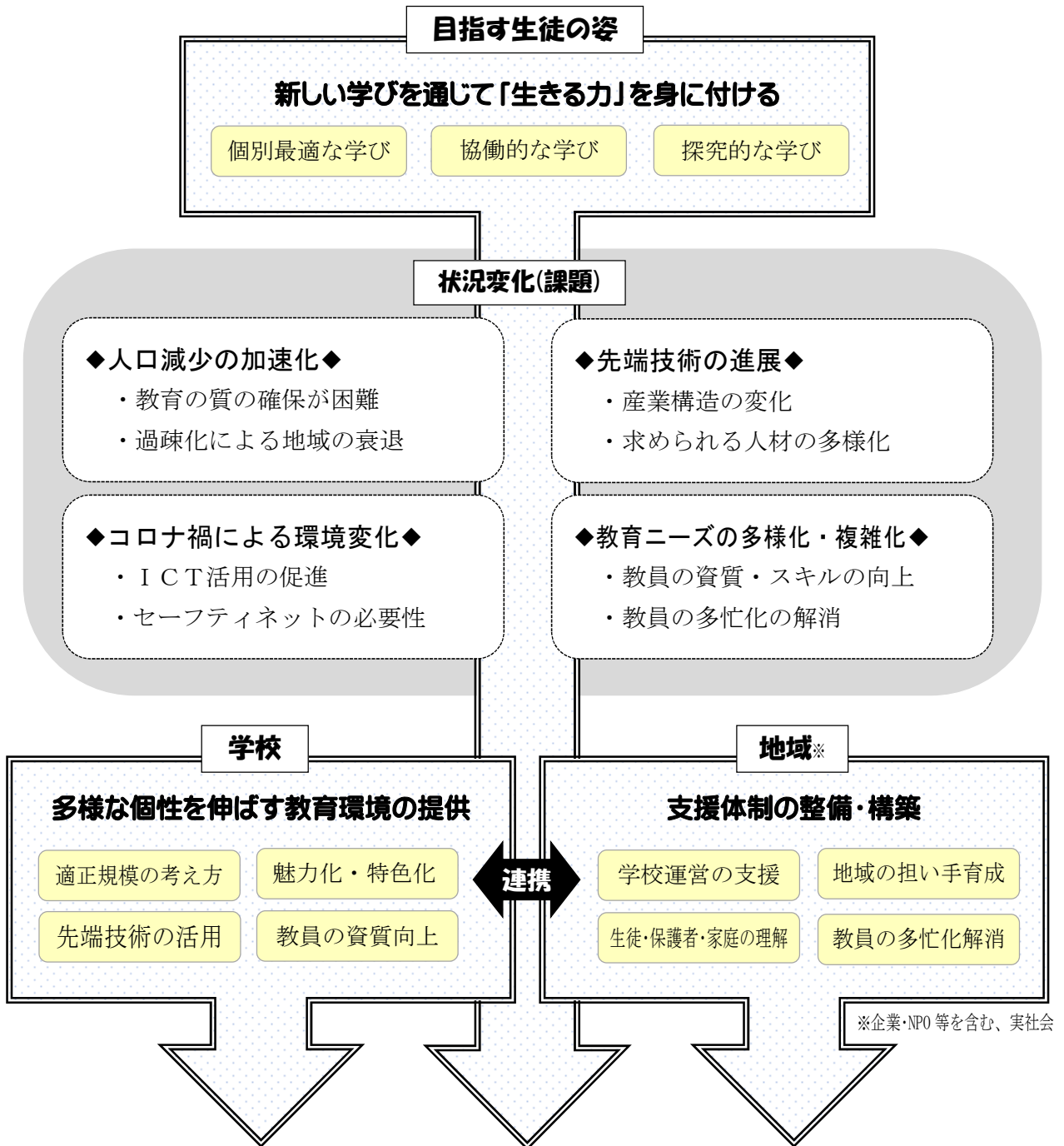
#### 5 P T(プロジェクトチーム)の設置 (メンバーは別途調整)

- ・検討委員会での議論を踏まえた課題に対して、専門的知識を持つ者を招聘し、P Tを構成する。
- ・検討委員会委員のP T委員兼任、又はP T委員の検討委員会へのオブザーバー参加により、P Tの協議内容を委員会の議論に反映させる。

#### 6 検討委員会とP T、地域協議会の進め方 (令和4年度)

- (1) 第1回検討委員会で検討項目について検討・整理し、P Tを設置
- (2) 第2回検討委員会でP Tによる協議内容を踏まえた中間まとめを行い、第3回検討委員会で取りまとめた後、「基本方針」として公表
- (3) 賀茂・小笠・沼駿地区で開催する地域協議会から出た意見等を検討委員会の議論に反映
  - \* 議論の過程は、総合教育会議及び実践委員会に随時報告し意見聴取
  - \* 「才徳兼備の人づくり小委員会」での議論を協議に随時反映





<在り方検討の論点>

- ・多様な学びの実現（高校の魅力化・特色化、学びの多様化に向けた効果的な学習手法）
- ・時代の変化を見据えた学校（適正規模の考え方、学校の在り方の選択肢、小規模校存続の手法）
- ・地域とともにある学校（学校支援と役割分担、地域人材の育成、学校施設の活用）
- ・教員の在り方（ティーチャーからファシリテーター、コーチ、メンターへの転換）

## 県立高校の在り方に係る地域協議会（賀茂地区）

（教育委員会高校教育課）

### 1 要 旨

7月6日（水）に賀茂地区において第1回目の「県立高校の在り方に係る地域協議会」を開催した。

### 2 開催概要

日 時	令和4年7月6日（水）15時15分～17時
会 場	下田総合庁舎別館2階賀茂キャンパス
出席者	市町長、市町教育長、PTA、産業界 ほか（下表のとおり）
議 事	<p>&lt;情報共有事項&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県立高校の在り方に係る地域協議会の設置</li> <li>・ 賀茂地域の現状</li> </ul> <p>&lt;協議事項&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 賀茂地域における今後の県立高校の在り方について（別添参照）</li> </ul>

<委員一覧>（敬称略）

	役職	氏 名
静岡県	教育長	池上 重弘
	教育部長	水口 秀樹
	教育監	塩崎 克幸
首長	下田市長	松木 正一郎
	東伊豆町長	岩井 茂樹
	河津町長	岸 重宏
	南伊豆町長	岡部 克仁
	松崎町長	深澤 準弥
	西伊豆町長	星野 浄晋
教育長	下田市教育長	佐々木 文夫
	東伊豆町教育長	横山 尋司
	河津町教育長	鈴木 基
	南伊豆町教育長	佐野 薫
	松崎町教育長	佐藤 みつほ
	西伊豆町教育長	鈴木 秀輝
PTA	下田市立下田中学校PTA会長	野田 政哉
	松崎高校PTA会長	笹本 美津代
産業界 その他	下田商工会議所会頭	田中 豊
	下田豆陽会会長	長田 育郎
	松崎高校同窓会長	藤井 要
	稲取高校同窓会長	佐々木 楨
	南伊豆分校同窓会長	渡邊 力

<オブザーバー等>

- ・ 賀茂地区高等学校長（下田高校、松崎高校、稲取高校）
- ・ 賀茂地区中学校長（下田中、稲取中、河津中、南伊豆中、松崎中、西伊豆中）
- ・ 賀茂地域広域連携会議出席者（森県議、経営管理部長）

(件 名)

令和4年7月6日

## 賀茂地域における今後の県立高校のあり方について

(高校教育課)

令和2年度に改訂された「賀茂地域教育振興方針」に基づき、教育現場では一体となって「賀茂の子※」の育成に取り組んでいる。

近年、賀茂地域の人口が大きく減少し、県立高校のクラス規模は、現行の10クラス規模から13年後には5クラス規模程度に減少することが見込まれる(賀茂学区中学卒業生推計ベース:406人→227人)。

地域の核としての公立高校の役割への期待が高まる中で、将来を見据えて、賀茂地域全体としてどのような教育環境を整備すべきか、県立高校の在り方を検討する必要がある。

※「賀茂の子」

“賀茂はひとつ”の想いのもと、ふるさとに誇りを持ち、地域の発展に貢献できる人

## 議論の方向性

- ・人口が大きく減少する賀茂地域の現状を踏まえ、子供たちにとって望ましい教育環境を確保するために、県立高校にはどのような将来像が求められるか。

## (検討の視点)

- 求められる教育内容
- 学びの質を確保するための学校の体制

## 国際バカロレア機構による認定に向け申請する学校の選定

(教育委員会高校教育課)

### 1 概要

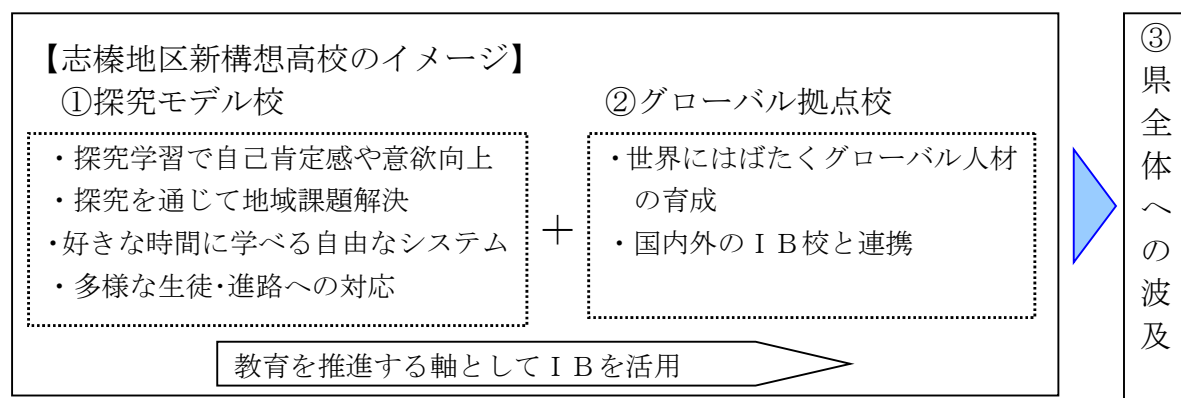
「静岡県立高等学校における国際バカロレア教育の導入基本計画」を踏まえ、国際バカロレア（I B）機構による認定に向け申請する学校を、志榛地区新構想高等学校(仮称・令和6年度開校予定)とし、認定に向けた準備を行う。

### 2 選定の考え方

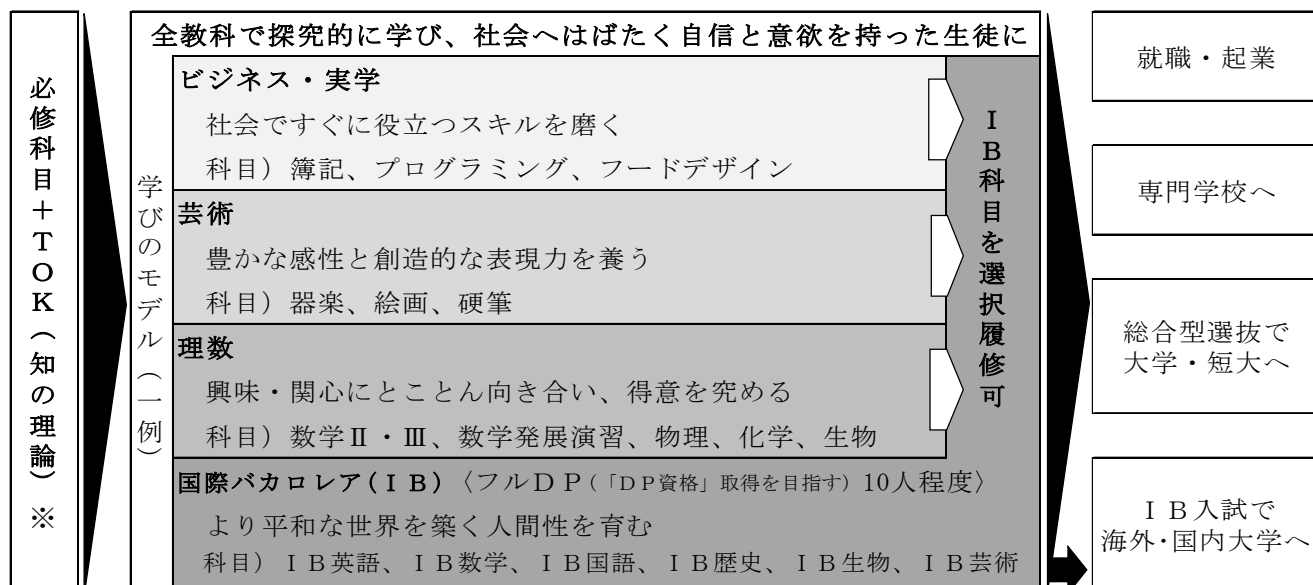
I Bプログラムを活用して、多様性や自由を尊重する新しい教育の象徴となる県立高校の実現を志榛地区新構想高校において目指す。

(志榛地区新構想高校の特徴)

- ・新設の高校であり学校のコンセプトを自由に設計することが可能
- ・多部制単位制で柔軟かつ多様な科目設定が可能（フレックスハイスクール）
- ・I Bが重視する探究活動、グローバル教育との親和性が高い
- ・富士山静岡空港に近く、国際的な交流の展開可能性が高い



### 3 新構想高校における学び（モデルケース）



※ TOK(知の理論)：I Bの考え方の基礎となる科目で探究学習の基礎力を養う。

#### 4 スケジュール（予定）

開校時から探究活動を軸とした学習を展開し、令和8年度を目処にIB教育導入

年度	R 4	R 5	R 6	R 7	R 8	R 9
内容	準備委員会 設置 ↓ 導入校 決定		志榛新構想 高校開校		IB一期生 入学	IB授業 開始
		関心校	候補校		認定校	

探究活動を軸にした教育

#### 【参考1】IBの概要

国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラムで、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者を育成することを目的とする。

#### （1）IBの学習者像（IBプログラムが育成を目指す人物像）

国際的な視野をもつ人間の育成を目指し、10の人物像を示す。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・探究する人</li> <li>・知識のある人</li> <li>・考える人</li> <li>・コミュニケーションができる人</li> <li>・信念をもつ人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心を開く人</li> <li>・思いやりのある人</li> <li>・挑戦する人</li> <li>・バランスのとれた人</li> <li>・振り返りができる人</li> </ul>
--	---

#### （2）本県におけるIB導入概要

（「静岡県立高等学校における国際バカロレア教育の導入基本計画」（R4.3）より）

項目	内容
コンセプト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幅広い知識の探究スキル、課題発見・解決能力、コミュニケーション能力等を育成するため、<u>少人数（10人程度）の双方向・協働型授業による探究的学習を实践</u></li> <li>・海外大学進学をはじめ、<u>多様な進路希望に対応する履修形態や充実した進路支援</u></li> <li>・国際バカロレアの教育理念を導入校全体で共有するとともに、県立高校全体の<u>グローバル教育及び先進的な探究学習の核となる拠点校</u>を目指す</li> </ul>
導入形態	プログラム デュアル・ランゲージ・ディプロマ・プログラム(DLDP) ※6科目中2科目以上を英語、他は日本語で実施。 本県では英語と数学を英語で、その他を日本語で実施予定
	履修形態 選択科目の履修 （個々のニーズに応じてフルDP※1と一部科目履修※2とを選択可能） ※1 海外大学受験に活用可能であるなどの国際的通用性を持つ「DP資格」の取得を目指す。 ※2 一部IB科目を履修するが、「DP資格」の取得は目指さない。
規模	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フルDP：10人</li> <li>・一部科目履修（選択）：各IB科目10人程度（IB英語は30人程度）</li> </ul>

## 【参考2】志榛地区新構想高校(仮称)について

### (1) 概要

項目	内容
学 校 名	未定（令和4年9～10月に校名募集予定）
開 校 年 度	令和6（2024）年度
設 置 場 所	現在の金谷高等学校の校地
募 集 定 員	160人／年（※令和5年秋の入学定員発表で確定）
設 置 学 科	普通科
教 育 目 標	多様な生き方を尊重し、興味・関心や進路希望に応じた学習によって生徒の持つ能力や個性を伸ばさせ、社会や地域に積極的に参画し貢献する自立した人材を育成する。
特 色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多部制単位制の「フレックスハイスクール」で、大学のように自分のペースで通学時間や時間割を決められる。</li> <li>・生徒の興味・関心、進路希望等に応じて多様な科目を選択できる。</li> </ul>

### (2) 周辺図

